

まれの気概で、悲憤の涙に流されて逝った方々のお陰で今まで生かして頂いた命を大切に、これからも元気に生きていきたい。

最後に、改めてすべての戦争犠牲者の方々に感謝の心を捧げつつ、永久に安らかでありますように祈念するのみである。合掌。

昭陽江からオンタリオ湖への流れ

カナダ 小橋川 慧

はじめに

今年、平成十七（二〇〇五）年、私の住んでいるカナダでも、「冬のソナタ」が放映された。このドラマに期待していたのは、昭陽江が流れていた私の知っている春川が出るだろうか、ということだった。春川は、韓国・江原道の道都で、ソウルの北東九十キロメートルの所にある。

ドラマの第二話を見ていて、私は「あつ、あれは！」と立ち上がった。ほんの二、三秒だが、昔と同じ形の小さな春川の駅を見たのだ。六十年前の九月中旬、当時小学校六年生だった私は、おびたらしい数の日本人と一緒に真つ暗闇の春川駅にいた。飼い主を追いかけて駅に来た三十四匹以上の犬が、悲痛な声で吠え続けていた。

日本人専用の客車は、京城（ソウル）に向かう

人たちで超満員だった。「この人たちはみんな帰る所がある。どうして僕は、この人たちと一緒にいるのだろうか。」車内を見回して、私はこの問いを何度も繰り返した。父の郷里は沖繩で、引揚船で仙崎港に上陸しても、そこから先の目的地はどこだろう。しかも、沖繩に占領軍として乗り込んできた米軍は、日本から沖繩に対する主権を完全に取り上げていた。終戦で私が得たもの、それは日本人であるような、そうでないような心理状態だった。幼・児童期を通して作り上げたアイデンティティーの一部が崩れ、私は複雑な心境で春川を離れた。

私は、青年期を戦渦で廃墟と化した米軍統治下の沖繩で、「琉球人」として過ごした。異民族支配には、マイナスもあったがプラスもあった。その一つが、ガリオア資金（占領地域援助資金）による米国留学制度。この制度による「一九五〇年代の偉大な異文化体験」を経て、私は多様性を重んずるカナダの大学で働くことになった。

これは、戦後四十三年間を北米で暮らした者が、その原点とも言える春川から沖繩への引揚げを、オンタリオ湖に面したカナダ最大の都市トロントから回想したものである。私の生い立ちは、父の仕事に大きく依存していたので、まず父と朝鮮とのつながりから話を始めよう。

一 私の春川以前

父の仕事

父、小橋川寛は沖繩県中城村の出身で、日本体育会体操学校（現・日本体育大学）卒業後の昭和二（一九二七）年に朝鮮半島に渡った。春川にあった道立師範学校を皮切りに、父は以後一貫して朝鮮人主体の学校で体育教師を勤めた。彼が生涯持ち続けたバスケットボールへの情熱の発端は、球技の盛んな朝鮮の学校だった。春川で父は、新潟県出身で土木建築業を営んでいた近井清太郎の次女キヨに出会い結婚した。

結婚直後に道立師範が廃止になったため、昭和四年四月、父は総督府立大邱師範学校に赴任した。

昭和七年に、後の朴正熙大統領が大邱師範に入学している。同じ年に、私は寛とキヨの四人の男子の長男として生まれた。

昭和十年、父が朝鮮の学習院といわれた景福中学校に転任したため、私たちは京城に移り、現大統領官邸青瓦台の近くに住むことになった。京城は、母にとっては女学生時代を過ごした思い出深い街である。そのうえ、景福中学の藤谷校長夫人は、母が最も尊敬した女学校の恩師だった。次男元行は京城で生まれた。

幼児期に由来する偏見

京城でのことだが、五歳のとき近所の朝鮮人の家に人が集まっていた、私はふらふらと入って上がり込んでしまった。ナツメや松の実と一緒にもち米を甘く炊いたヤクパブや塩飴をまぶしたトック(餅)の馳走になった。この「ふらふら」は私の習性になり、無意識のうちに、「未知の人も歓待する」という勝手なイメージを朝鮮の人に持つようになった。このイメージがあったからこそ、李

承晩時代の韓国にも出掛けられたのだろう。

私の家の隣に、みんながターランと呼んだ京城帝国大学の学生がいた。敵の飛行機に光が見えぬように、電灯に黒い布などをかぶせる灯火管制の夜、ターランは電灯を煌々とつけたまま友だちと酒を飲んでいた。それで、警察で油を絞られた。京城大学の入試の成績は毎年朝鮮人が一番だが、その年は日本人が一番で、「よくぞ日本人のために頑張った」とその学生と防空演習中に祝杯を挙げた、とターランは懸命に説明した。ターランの話の信憑性はともかく、「良くできる朝鮮人」への私のコンプレックスはターラン由来のものらしい。

二 春川、鳳儀山と昭陽江

「よく遊べ」そして「よく遊べ」

父は、結婚式の際世話になった滝正善校長の誘いに応じて、昭和十四年四月、体育と寄宿舎運営の責任者として、新設の総督府立春川師範(春師現・国立春川教育大学)に赴任した。滝校長は、春川の町から四キロメートル離れた農村に春師の

敷地を求めた。父は、そこにできた四百八十人収容の朝鮮で最大の寄宿舎の舎監長を終戦まで六年

半務め、学生らとの絆を強めた。体育施設として、四百メートルトラックのほかサッカー場、バスケット、バレー、テニスの各コートなどを完成させている。春川で三男久光と四男孝行が誕生した。

師範学校教官の住宅や道庁の官舎が集まってできた新しい住宅街に、父は自分の家を持った。家の裏に小山があつて、春はアヤマやツツジの花が至る所で咲いた。冬になると、裏山は櫛で遊ぶ格好の場だった。緩やかな斜面を滑る易いコースもあり、松の木と木の狭い空間をすり抜けて、急斜面を滑り降りる難しいコースもあつた。つまり、都市京城とは違う春川なりの楽しみがあつた。

春川に移った年に、私は母も叔母も叔父も学んだ春川緑ヶ丘小学校に入学した。校訓の一つに「よく学びよく遊べ」があつた。父は遊びも大切だと言うので、私は学校の宿題よりも「よく遊べ」に傾いた。そのためか、通知表には毎学期「努力が

足りない」と書かれた。

緑ヶ丘校歌の一番は「鳳儀山の峯高し」、二番は「昭陽江の水清し」と終わる。鳳儀山は春川の象徴で、その裏を悠々と流れていたのが幅二百メートル、水深三メートルの昭陽江だ。最初の冬、昭陽江で私は父からスピードスケートの特訓を受けた。後に、父の学生全漢炳さんの特訓も受けた。昭和十九年一月に最後のスピードスケート大会が行われ、私は五百メートルに出場した。結果は、一等福島(高等科)、二等嶺(六年)、三等小橋川(四年)だった。涙ぐましい努力の成果だ。

夏休みは「よく遊べ」に徹した。祖父は、春川から百キロメートルほど南下した忠清北道の朝鮮人ばかりの集落で、土木仕事を請け負っていた。お陰で、私は夏休みに祖父の工事現場を訪れて朝鮮人の家に泊まり、朝鮮人の子供らと遊び、朝鮮の食事を堪能するユニークな体験もできた。

朝鮮の生徒たち

大学生ターランに教えられた「朝鮮の人は良く

できる」は、緑ヶ丘に入っただけで実感した。例えば、航空記念日に開催された、ゴム動力で飛ばす模型飛行機大会で、春師付属と本町小学校の朝鮮人の子供らは圧倒的に強かった。私は何度も本町小学校の生徒らの家に出掛けて、模型飛行機作りの話をした。言われてみれば当たり前のことだが、飛行機を軽くすることに重点を置いていた。主翼の中央の箇所以外は、市販の竹ひごを細くして使った。車輪も主翼のリブも、サンドペーパーで薄くした。胴体も削れる所は細くした。車輪を薄い紙にしてみよう、とも言った。緑ヶ丘の先生は、これだけの実験さえ指導しなかった。

飛行機大会への代表選考会で、五年生の私の飛行機は五十八秒飛んだ。緑ヶ丘の記録でもあり、前年度大会の一等の記録に匹敵する。ところが、大会の日に私にアドバイスしてくれた本町小学校の生徒らの飛行機は、二分を過ぎてはまだ青空高く浮かんでいた。本町小学校の種明かしをした緑ヶ丘の先生はいない。良くできる朝鮮人の生徒ら

は、私にとって欲求不満の源だった。しかし、刺激的な連中だった。

こんな思いもある。日曜になると最低十人の春師の生徒が我が家に来て、写真集を見たりトランプをしたり、私にポスターの描き方を教えたり、夕食前まで自由に遊んで寄宿舎に帰っていくというパターンがあった。母は菓子類、果物、ぜんざい、飲み物を用意して、彼らを丁寧にもてなした。闇でも物資が入手できなくなると母も困り果て、「食材さえあれば何でも作るが、配給制で手に入らない。良い知恵はないか」と、生徒たちに相談を持ちかけた。生徒たちは黙って帰った。

ある日、箱に詰められたリンゴが届けられた。ナシ、干し柿、スルメ、白・黒の朝鮮飴、蜂蜜の瓶詰めも送られてきた。送り主の中には、大邱師範の卒業生の名前もあった。この集まりは終戦の年まで続いた。

無邪気な海軍への憧れ

私が生まれる一年前に、いわゆる十五年戦争の

時代が始まった。幼児期の記憶も、遊びは戦争ごっこ、本は「のらくろ小隊長」、歌は「僕は軍人大好きよ」と、戦争に関連するものが多い。しかし、十二月八日の日本海軍による真珠湾攻撃の朝までは、漠然とした軍国少年だった。あの朝、母は青い顔をして「日本はアメリカを相手に戦争を始めたい」と言っただけで座り込んだ。三年生の私には、アメリカと戦争をすることの重大さが理解できず、母が何を心配しているのか分からなかった。

学校では連日、マレー沖海戦、シンガポール陥落と、勝ち戦のニュースを校長先生も担任の先生も興奮して報告するので、母の心配など忘れた。三月に入って、特殊潜航艇で真珠湾攻撃をした九軍神の報道があると、私は海軍に胸の血を昂ぶらせる少年になった。彼らがチョコレートを持って、「まるで遠足に行くみたいだ」と言っただけで潜航艇に乗ったということを、私は繰り返して思い出した。

四年生の時のクラスの担任は、佐久間という若

い女の先生だった。私の最初の質問は「佐久間艇長（潜水艇沈没の事故の状況を細かく書き残した軍人）のご親戚ですか」だった。答えは「否」だったが、先生は劇「海軍の兄さん」を書いて私たちを喜ばせた。「月月火水木金金」がクラスではやっていた。

犬死をするな

「勝ち抜く僕ら小国民」と歌いながらも、周りには必ずしも軍国主義一色ではなく、軍隊や戦争を違った面から考える資料もあった。五年生の時、春川で歩兵の演習があり、その夜、二人の幹部候補生が我が家に泊まった。夕食のとき、小柄な方の兵隊が私に将来について尋ねた。横山少佐に憧れていた私は海軍と答えたかったが、相手が陸軍なので躊躇した。すると、母が京城大学と答えてしまった。母が私に軍人の学校に行ってほしくないことを知って驚いた。もっと驚いたのは、二人の兵隊が母の答えに大いに賛同したことだ。相撲の選手のように大柄な兵隊は、軍人に憧れて京城

大学を中退して兵隊になったが、軍隊は想像もできないくらい所だ。後悔して、每晚布団の中で泣いている。「絶対に、軍人にはなるな」を繰り返した。世界一強いと信じていた日本の兵隊さんが毎晩泣いていると聞かされ、私はショックを受けた。部隊に帰った二人の幹部候補生から来た葉書に、

「将来の計画は変えないように」と書いてあった。サイパンの玉砕があった昭和十九年の夏ごろから、父は怒りっぽくなった。サイパン玉砕の後、沖繩の学童の宮崎、鹿児島、熊本への集団疎開が始まった。父の兄の三人の息子が、このことを宮崎から知らせてきたのだ。沖繩の学童疎開を知って、父は米軍の沖繩上陸は時間の問題だと考えた。これが、父の感情の変化の原因だった。

翌年の三月、父が菓子屋に頼んでおいた押し餅を持ち帰って来た夜のことだった。私が聞いたばかりの硫黄島玉砕のことを話すと、父は持っていた押し餅をいきなり台所の床にたたきつけた。大きな音に驚いた母が、「食べ物を投げるとは」と父

た。憲兵がこの話を聞いていたらどうなるのだろうか、と怖くなったのを記憶している。これは、やられてもやられても突撃を繰り返す、玉砕戦に対する柚木先生の批判だったのだろうか。

沖繩戦が終結するころには、京城から緑ヶ丘へ縁故疎開の転校生が増え始めた。七月の終わりには、仁川から春川へ学童疎開が始まった。ソ連軍が日本に宣戦布告をしたのを知って、母と叔母は「これで日本も終わりだね」とだけ静かに言った。そのような状況でも、緑ヶ丘の五年生以上の生徒は、午前中は剣道に柔道あるいは薙刀、午後は鳳儀山を見ながら昭陽江の下流で水泳と、暑中稽古を楽しんでいた。八月十四日の夕方、明日の正午に集合との緊急連絡があり、平和に見えた暑中稽古も突然終わった。

三 出朝鮮半島

日本語教科書焼却事件

八月十五日の正午、多くの日本人が体験したように、私たちも雑音ばかり耳に残る玉音放送を学

をなじると、「次の玉砕は沖繩じゃないか。日本は沖繩を見捨てる気だ」と大声でどなって、父は家を出て行った。これは、父が戦争に対して見せたただ一度の感情であり、私が沖繩を初めて意識した出来事でもあった。沖繩の玉砕は、父にとって誇りではなかった。

沖繩戦の最中に、緑ヶ丘の柚木先生に赤紙がきた。私たち六年男子が「先生、応召おめでとうございませう」と言うと、「僕は坊主は大嫌いだ。何がめでたい」と返され、私たちを教室に誘いこんだ。柚木先生が「応召（和尚Ⅱ坊主）なんて何がめでたいか」と言われているのに気付き、恐ろしくなった。

教室に入ると『大隊長の命令だ。敵の機関銃に向かって進め』と言われたら、君たちは機関銃に向かって突っ込むか」と先生に問われ、私たち全員「はい！」と答えた。先生は静かに「それを犬死という。犬死はしたくない。犬死は怖い。君たち犬死はするな」そう言われて部屋を出て行かれ

校の講堂で聞いた。終戦と降伏の放送だったとすぐには信じられず、男の先生が確認のために警察に走った。結局、「元気で日本でまた会いましょう」と先生に言われて家に帰った。夜になると、ある韓国の教育者が回顧したように「圧迫から開放された夢のような感激」を表現して、朝鮮人は「マンセイ、マンセイ」の叫びを繰り返した。

十六日の朝、我が家では父がいつまでも春川師範のことにこだわるので、ひと騒動があった。父が「今日は宿直だ」と、愚直にも一人で朝鮮人集落にある師範学校の寄宿舎に出掛けると言い出した。防空壕掘りのために、生徒らが夏休みを返上して寄宿舎にいたのだ。「朝鮮人の校長代理も決まって、師範学校とは関係はないでしょう」と母は反対したが無駄だった。

三日目に父は帰って来た。日本は朝鮮での警察権を失って、日本人の一人歩きは危険だといううわさが流れていた。それで「大丈夫だったの？」と尋ねると、「先生をお招きします、と生徒らに言

われた」と父は上機嫌だった。当時、母も私も生徒らの誠意を理解する余裕はなかった。「お招きします」はその場の雰囲気から出た言葉で、生徒たちはすぐ忘れるだろうと思った。

父は、自分の仕事についてほとんど語らない人だった。二十五年経って、韓国から送られてきた新聞記事を読んで、私は十七日の夜の出来事を初めて知った。あの夜、生徒たちが運動場で教科書を積み上げ、「これから日本帝国主義の教科書を焼却する」と大声をあげ、点火しようとしていた。そこに駆けつけた父は、「教科書を燃やしてはいけない。今は、朝鮮語の教科書がない。それができるまでは、日本の教科書の内容を選択して勉強しなくてはならない」と、生徒らを説得した。説得に応じて火を消した生徒らを激励すると、三年生の金商周級長（後にソウル大学教授）らは、「ご期待に添うように頑張ります。先生を必ずここにお招きします」と再会を誓い合ったという。

ところで、先生や級友たちと日本での再会を約

と南に分断されると、少数のソ連兵が南朝鮮の春川にまで侵入して、車や時計などの略奪を始めた。北朝鮮が春川への送電を中止すると、米軍が春川に進駐した。そのときの長い列車で、翌々日、春川のほぼ総ての日本人が京城に移動するよう指示が出た。その準備を始めたところに春師の校長先生が来て、父に学校の残務整理を依頼した。「家族は心配するな、独身の先生たちが助けに来る」と校長先生。

駅に行く日、独身の先生は来ない。みんな自分のことで精一杯なのだ。これ以上待ってもしょうがない。「行くね」と言うと、父は私を抱きしめて声を出して泣いた。そして、真つ暗闇に去ってゆく小学校六年の私、一年の元行、三歳の久光、赤ん坊の孝行と母を見送った。

門を出ると、近所の大学生が牛車を引っ張ってきて「荷物を積みなさい」と言う。荷物がなくなっても駅まで四十分はかかる。大学生の気配りには感謝の言葉もない。牛車に荷を積み少し行くと、数

束して別れたが、我が家には難題があった。私の家族も含めて、沖繩の人には帰る所が無かった。一体、日本のどこに帰るのだろうか。引揚げ先を尋ねると、父は私を安心させるために「鹿児島島の川内」と答えた。川内は母の妹、朝子叔母の引揚げ先だ。それで、遊び仲間には「川内に帰るんだ」と、私にも引揚げ先があるように振る舞った。

引揚げ先が不明でも、朝鮮には残れない。母は、世話になった朝鮮の家族に箆笥類を譲った。父は体操の本を二冊、私にスケートの指導をした全漢炳さんに「役に立つでしょう」と渡した。本をいくらかでも買うという男が、現代日本文学全集を始めいろいろな全集ものを買ってくれた。私も三セツトの剣道防具を中学生に買ってもらった。このとき、京城のように「倭奴ワエム、早く帰れ」とか、「船便がなければ泳いで玄界灘を渡れ」といったビラを家に貼られたことはなかった。

さらば春川、反日家の援助

九月二日、北緯三十八度線を境に朝鮮半島が北

家族の集団に追いついた。「荷物を、お願いしませ」と母にすがる人、「もう歩けない」という泣き声。この様子を多くの朝鮮人が道の両側に立って傍観していた。「男の人は、駅に着いたらまず小橋川さんの荷物を汽車に載せること」という約束で、大学生は一家族一個の割合で荷物を載せて牛車を動かした。牛車の主、朝鮮人は私たちから離れてついてきた。

汽車は超満員だが、何とか家族の席を確保した。しかし、私たちの荷物をだれも約束通りに運び込まなかった。動くこともできず、取りに行くこともできない、そんな状況を察知した例の大学生は、一緒に来た男の人たちを窓から押し出し、私たちの荷物を運び込ませた。

「はじめに」に書いたように、私は他の日本人との間に違和感を持ち、行き先不明の旅を始めた。

春川を出て約七時間後に、私たちの汽車は京城の城東駅に着いた。春川からの引揚者は収容所になっていた竜谷女学校に向かったが、私たちは「二

階をお使い下さい」というかつて景福中学で父の同僚だった数学の日本人教師の厚意に甘えることにした。

さて、春川の家に一人残った父の所に、一人の朝鮮人が様子を見に来た。日本人が去った後の空き住宅で、物あさりの騒ぎがいつ起こるか分からない。ここに一人でいては危ないと彼の家に父を案内し、毎晩鶏料理で栄養補給をしてくれたとのこと。この人は植民地時代、筋金入りの「独立運動家」「反日家」だった。父は反日家の援助を得て、無事残務整理を終えて、七日後に京城の私たちに合流した。

京城での見かけと実際

どういうわけか、京城に出てきた父は焦りを見せ、私たちは数学の先生の家族より先に釜山に出発することになった。朝一番の汽車に乗るために、京城最後の夜を駅の待合室で、おびただ夥しい日本人と一緒に過ごした。真夜中、「火事だ」の叫び声に目を覚ました。炎がすぐそばまで迫っているように見

えたので、駅の内部は騒然となった。数人の駅員が現れ、「火事ではない。動いてはいけない」とパニック状態の私たちを静めた。炎は小さくなった。駅の外に可燃物を積み上げて火をつけ、火事だと錯覚させて逃げ出す人の荷物を失敬する悪い奴の常套手段だと駅員は説明した。

翌朝、ホームに出て驚いた。一番先に改札を通ったはずなのに、どの客車も既に満員だった。父は開いている窓から荷物を押し込み、続いて自分も入った。隣の窓が開いて、「ここから、ここから」と中から男が言う。「ありがたい」と母がリュックサックを窓から入れると、同時に男は窓を閉めた。汽車は動きだした。これで母の一番高価な着物類を無くすことになる。

二時間ほど経った。途方にくれてホームに座り込んでしまった私たちの所に、突然父が現れた。次の駅で下車して戻って来たのだ。

父が戻って来てほっとしたが、次の列車を待つ以外に手だてがない。ふさぎ込んでホームに座り

続けていると、見知らぬ朝鮮人が近付いてきた。「小橋川先生ですか」と尋ね、釜山に行く次の列車が待機している場所を教えてください。景福中学での父の教え子が駅で働いていて、その人からの伝言だと付け加えた。

見かけの火事に騙されそうになり、見かけの親切を信じて荷物を盗まれたりした後だったが、言われた場所に行ってみることにした。話を聞いていた二組の母子家族もついて来た。教えられた場所では蓋貨車列車を見つけた。貨車の中には既に十数人の朝鮮人がいて、私たちを中に入れてくれない。日本語のよく分かる若い男がいて、暫くこの男を中心に「赤ん坊を抱えて昨夜から汽車を待っているのだ」など、日本語と朝鮮語でやりとりがあった。若い男は、女と子供に乗車許可を出したが、父にはホームで待つようにと言った。

辺りが薄暗くなりだしたころには、貨車はほぼいっぱいになった。汽車は突然動きだし、どんどん走り続けた。日本人女性が「私はこの辺をよく

知っています。ここはもう京城ではないです」と叫んだ。父を京城に残したまま、私たちはどこに向かっているのだろう。釜山行きも父とは別行動かと考えていると、汽車が止まった。バックを始め、やがて父の待っているホームに入った。日本語のうまい例の男は、父の姿を見つけると「こっちだ」と手招きした。この男は、父と私たちを引き離したりして悪い奴に見えた。しかし、あれは日本人の乗車を嫌う朝鮮人をなだめるための、妥協策だったのかもしれない。大勢の朝鮮人に囲まれないながらも、私たちが釜山まで無事だったのは、彼が皆を説得したお陰かもしれない。

貨物列車は山の中で長時間停まったり、坂を一回で上れず後進―前進を繰り返しながら、二十時間掛けて釜山に着いた。幸い、山中での停車中に、群衆に襲われるといったことはなかった。

釜山で英会話初練習

私たちは駅の近くの収容所の寺で、二十家族ほどの日本人たちと引揚船を待つことになった。釜

山は「出朝鮮」最後の街、それで心に余裕ができたのか、收容所の雰囲気は和やかだった。

釜山には、まだ日本の兵隊がいた。春川で憲兵が「好きだけ持って行け」と、民間人に軍の倉庫を開放したことがあった。そこで、釜山の市場で偶然会った兵隊に毛布をねだってみたところ、毛布五枚に肉団子の缶詰数個を收容所に届けてくれた。この毛布は、それから五年間も私たちの貴重品だった。

收容所の近くに米軍宿舎があった。「ハロー」はみんなが使うのでつまらない。母に習って、アメリカの将校に「How do you do? (ハウ ドウ ユウ ドウ?)」と言うと、将校は「ハウリユウリウ」と反応した。日米発音の差を知った初体験だった。初めての英語に反応があったことは、小さいことだがそれからの英語学習への自信・意欲になったのは確かだ。

敗戦から二カ月経っても朝鮮海峡の機雷の処理は完了しておらず、闇船（密航船）で日本に帰る

中だった。駅近くの旅館に駆け込むと、「うちは乞食を泊める所ではない」と女将に言われたのにはビックリ。女将に罪はない。京城を出てから二週間は風呂に入っていない、父は髭も剃っていない。三日ぐらい船倉の荷物の上や客車の通路でごろ寝をしてきた。汽車の煤煙で汚れていただろう。「これでは、高等官五等（父の教職中の肩書き）も乞食扱いされても仕方がなかったねえ」と、随分あとになって母は笑った。ともかく、私たちは駅前旅館で生活を始めた。

駅前旅館七日目の夜、東奔西走して家探しをしていた父が帰って来るなり、「明日はここを出る」と一カ月振りに笑顔を見せた。永尾という集落の福元さんが、長男が嫁を見つかるまで離れを使うようにと言って、私たち家族を引き受けてくれると父は説明した。縁故者ゼロという町でのこと、私たちは本当に幸運だった。

人々の善意に支えられて中学生に

福元さんの離れは四畳半ほどの広さで、それに

のは危険だった。だが、正規の引揚船にいつ乗れるか分からない。私たちは、十月中旬、十五トンの闇船で真つ昼間、朝鮮半島釜山を発った。米海軍憲兵の船に止められると、船長はすかさず一升瓶と札束を渡した。憲兵は笑って「行け」の合図をした。

四 鹿児島県大口町

小倉から大口町へ

私たちは、翌日の正午には九州の小倉に上陸した。一人の男が「今夜は兄貴と酒が飲めるぞ」と叫んで、日本に帰った喜びを表した。「兄は玉砕した」と思っていた父は、これをどう聞いただろう。

少しでも沖繩に近い所に行こうと、小倉から鹿児島行き列車に乗った。途中、少しずつ鹿児島の様子が分かると、空襲のなかった鹿児島県大口町（現大口市）が川内市や鹿児島市より家は借りやすいだろう、と父は言った。

空襲の激しさを物語るかのように何も残っていない川内駅を経由して、大口町に着いたのは真夜

囲炉裏がついていた。母家に住む福元さんの家族六人は、みんな朗らかな人たちだった。三十世帯ぐらいで構成されていた永尾集落全体から温かく迎えられる、私たちはそこに何年も住んでいたかのように、福元さんの屋敷内での生活を始めた。

新しい学校、大口東小学校で引揚者とかよそ者といった扱いを受けた記憶はない。生徒らは親切で、遊び・勉強仲間にスムーズに適応できた。生活の必需品、草履の作り方を根気よく教えてくれた。草むらに仕掛けた網に、鳥の習性を利用して追い込んで捕らえる遊びも教えてくれた。

私は、中学一年生から六年の国語と算数の教科書を借りてきて、それらを毎夜遅くまで竹製のペンを書き写して、中学入試の準備を始めた。これを知ったクラスメートの舟木君が、中学校教師の彼のお父さんが不要になった相当量の原稿用紙を持って来てくれた。六年の教科書が終わると、五年、そして四年の教科書まで書き写した。

年が明けると、福元さんの長男が結婚すること

になった。永尾と西永尾の青年団が共同の詰め所を持っており、青年団の好意で私たちはその詰め所に移り住むことになった。詰め所は新築同様の二階家で、私は二階の広い部屋で受験勉強の最終段階に入った。緑ヶ丘の市川先生や同級生の岩元君とも連絡が取れ、励ましの葉書がよくきた。

町では、アメリカカ兵が二十人ほどの中学生を相手に英会話教室を開いていた。私はこの教室にも通った。中学入試の数日前、馬に乗ったアメリカ兵二人が突然東校の満開の桜を見にやって来た。

私は彼らに近付いて「How are you? Beautiful, isn't it?」そして別れ際に「See you again.」と、今ならだれでも知っている表現を使った。初めて英語を聞いた周りの生徒たちには、私が米兵との会話を楽しんでいたように見えたらしい。この出来事が誇張されて、中学校の先生たちの耳に入り、大口中学入試の口答試問で「君はアメリカ人とペラペラ話ができるそうだな」と訊かれた。アメリカ兵はいろいろ私に喋ったが、聞き取れたのは「

二倍になり、鹿児島に持って行くと、さらに良い値でさばけた。ある日、堂々とした見知らぬ婦人が家に来て、「日本の政府は沖縄の人に何をしてくれた。何もしてくれないなら、沖縄の人は自分で勝手に生きるしかない。闇でも何でもやりなさい」と母を励ました。

中学生になった私は、週末になるとしばしば母と鹿児島のお得意さんに米を運んだ。私たちは持参した米の量を相手に言い、向こうは黙って金を渡してくれる。鹿児島駅の構内で、浮浪児らの武勇伝を聞きながら一夜を明かし、翌朝大口に戻るのだ。母はこのほか、激励に来た例の婦人と水俣に干物を仕入れに行ったりした。

沖縄へ引揚げ

終戦から一年経ち、沖縄への引揚げが開始された。父にとって、大口にはプラスの面もあった。永尾にある伊佐農林学校の教頭が、父に体育教師の仕事を持ってきた。食糧難のとき、農林学校の仕事は父にとって相当に魅力のある話だった。

ユーティフルぐらいだった。

大口の中学校と女学校に合格した大口東校の生徒の家族で、先生たちへの「謝恩会」をすることになった。信じられないことだが、父は三十円の会費が払えないと言うので私は出席できず、その日は一日山に薪取りに行った。私は入学試験の全科目に満点を取り、成績一番だったので、謝恩会に出席できないのは残念だった。

夜十時過ぎ、ガラス戸を激しくたたく音がした。担任の寺師先生が、謝恩会から自宅とは逆方向にある私の家に合格祝いの言葉を伝えるに、わざわざおいでになったのだ。「よくやったな、ありがとう」と言われ、これでは話があべこべで恐縮した。寺師先生は、教員生活最後の年に予想を上回る合格者を出して嬉しそうだった。

父には、終戦の翌年の六月まで非常勤の仕事しかなかったので、家の経済は母の才覚に依存していた。福元さんの離れに住むようになると、母は現金をどんどん米に変えた。米の値段はまもなく

沖縄に帰った最初の五、六年は、鹿児島に留まるべきだった、と父は後悔したらしい。それでも父は、理由も言わずに沖縄へ帰ると言いだした。

大口中学の小園先生は、「沖縄には中学校より上の学校が無い。勉強を続けるために日本に残れ。僕のうちに来い」と私に言われた。逆に九州大学の学生は、「沖縄に帰ればイメールにもハーバードにも行くチャンスがあるぞ」と明るい話をした。沖縄に望郷の思いなど私にはなかったが、アメリカ留学には心が動いた。二学期の中間考査が終わると、私は英語の勉強だけに集中した。

十一月中旬に、私たちは一年間世話になった永尾の人たちに別れを告げた。荷造りから駅へ荷物の運搬まで、永尾の人たちには最後まで助けてもらった。

私たちは、DDTの洗礼を受けて鹿児島市内の大島・沖縄引揚者収容所に入った。そこで、生まれて初めて沖縄の民謡と踊りに接した。そして、十二月六日の夜、引揚船で鹿児島港を出た。

五 「国破れて山河なし」の沖縄

我が家はテント小屋

十二月八日の昼過ぎに、私たちは那覇港に着いた。そこから久場崎の収容所に行く途中、父は私たちを乗せたトラックが故郷の中城村に入ったのに気付いた。ところが、激しい艦砲射撃で昔を思い出させる物が破壊されてしまったためか、父は自分が生まれ育った集落泊を通り過ぎるのを気付かなかった。「国破れて山河あり」と中国の詩人は言ったが、沖縄は「国破れて山河なし」だった。

翌朝、父の兄、小橋川薫が収容所に私たちを小型トラックで迎えに来た。泊は近くだった。伯父、薫の屋敷には米軍野戦用のテント小屋が五つ設けられていて、その一つが我が家だった。伯父は「帰って来るなど連絡したのに」と、父につぶやいた。

帰沖して半年後、薫の息子や父の二番目、三番目の兄たちの息子ら総勢十二人で、四メートル四方だが茅葺きの私たちの家を造り上げた。家の壁も雨戸も、野戦用テントを利用した。それから四

年ほど、鼻の穴が真っ黒になる石油ランプを電灯の代わりにした生活をした。

薫の九男で五歳の友吉は、よく話しかけてくれたが、沖縄の言葉なのでさっぱり分からない。そのたびに伯父はそれをヤマトグチ（日本語）に直し、友吉に話してみろと促した。私は、ふと小学校に入るまで朝鮮語を使い、一年生になって初めて日本語を覚える朝鮮の子供を思い出した。言語に関しては、沖縄の子供も朝鮮の子供と同じだと思った。

沖縄の言葉といえば、帰沖して間もない高校の授業で、先生が私に意味の分からない言葉で名指しした。私が黙っていると「君、失礼だね。先生に名前を呼ばれたら返事ぐらいするものだ」と機嫌が悪い。私もむっとなり「僕は『こぼしがわ』です」と返すと、「小橋川は沖縄では『くわしちや』でしよう、知らないのか！」と怒鳴られた。小橋川が「くわしちや」とは、故郷沖縄は異国だった。

高等学校模様

沖縄の教育が、学制改革で6・3・3制を採用したのは昭和二十三年で、それまでは8・4制(初等科八年、高等学校四年)だった。コザ高校で相談した結果、私は高校一年に編入学することになった。後に学制改革で高校二年を二度したが、私の義務教育年限が二年足らず、日本やアメリカの大学で問題になった。

コザ高校の教室や寄宿舎のほとんどが、米軍の残っていたコンセット(トタン張りのかまぼこ型兵舎)だった。小学校では、「馬小屋という名の教室」が普通だった。

家から高校まで八キロメートル。当時の沖縄にはバスの便などなく、家の前の軍用道路に出て、アメリカ兵の運転するトラックやジープをヒッチハイクして通学した。翌年の四月から、父もコザ高校に赴任したが、確実に乗せてくれる車がない限り、父は徒歩通勤に徹した。帰沖して一年ほど経つと、宜野湾村にあったコザ高校の分校が野嵩高校(現普天間高校)として独立した。学校は家

から四キロメートルの所にあり、私は父とともにコザ高校から野嵩に移った。

沖縄の英語熱は高かった。しかし、英語教育の水準は教材も不十分で、特に高いとは思わなかった。私は英会話の勉強がしたくて、沖縄に帰った最初の夏休みに、勝連のホワイトビーチにあった米軍の基地に、沖縄人の自動車修理工と一緒に泊まり込んだ。アメリカ兵がよく使う「プリ・soon」
「プリ・good」の「プリ」と聞こえるのはprettyのことだと、このとき知った。ついでに、プリティは形容詞(綺麗な)だけでなく、副詞(大変)として頻繁に使われることも学んだ。夜は、アメリカ兵と野外の映画劇場に出掛けた。陽気な彼らに「合衆国に行けよ、リッチになれるぞ」と言われ、アメリカには簡単に行けそうな気になった。

バスケットボールなどは、軍の放出物資として手に入った。朝鮮で、この競技に情熱を注いだというだけあって、父は赴任した年に全島高校バスケットボール大会でコザ高校を優勝させた。翌年、

父の率いる野嵩高校バスケット部は新設校の意気
を示し、全島大会で優勝した。

一方、母は厳しい現実には直面していた。当時、
メリケン粉やトウモロコシなどの配給される食糧
は不十分で、あとは自分で生産しなくてはならな
い。父には生産する時間がないので、母は毎日近
所の人から芋を買った。沖繩の教師の給料は安く、
芋を買うのに十分でなかった。休学して働いてく
れないか、と母はコザ高校二年の私に頼んだ。

フリーピン歩兵部隊で働いている従兄に相談し
たところ、「学校は続ける。ハウスボーイをやつて
みる」と言われた。この仕事にルールはない。「シ
ヤツ二枚洗つてタバコ一個」といった具合に適当
なレートを兵隊らと決めて、私は専ら洗濯場で稼
いだ。そのころは固形石鹸を使つての手洗いだつ
た。私は、足も使った。洗濯屋のない時代なので
重宝がられ、やがて洗濯物を家に持ち帰ることも
許され、母も洗濯業に参加した。支払いとして受
け取ったタバコは、現金に換えてくれる商人に

を目的にした外語学校に限られていた。昭和二十
四年一月に開催された全島高校自治会で、私は向
学心に燃えた高校生たちに出会った。一年制の文
教、外語だけでは人生の選択肢が限られている。

高校生の代表は「日本の大学への進学」をテーマ
に夜遅くまで議論した。翌年の一月に開催された
会合でも、大学進学の問題を二日に亘って議論し
た。その結果、中部地区自治会長だった私は、全
島自治会長らと「大学進学のために、沖繩の学生
が自由に日本に渡航できるように便宜を図ってほ
しい」と米軍政府教育部に陳情に行った。軍政府代
表が「通訳なしで話そう」と言ったのが嬉しかつ
た。余談だが、二年後にこの望みは叶えられた

向学心をあおられた私は、家では大学進学をあ
きらめてほしいと父に言われていた。多くの教師
が生活苦に喘いでおり、我が家も例外ではなかつ
た。しかも、四男孝行が十月に突然体調を崩して
入院し、母は孝行の看病のため家を出たままだつ
た。いつの間にか、家の食事の準備は小学校五年

渡した。ちなみに、ラッキーストライク十個が二
百円、日曜だけ働いてもタバコ三十個稼げば、一
カ月の働きは父の給料の二倍になった。

洗濯の他に、私は母とミシンを持っていて彼女
の友だちに、大量の洋裁の仕事を生隊たちから取
つてきた。兵隊たちに頼まれて、ラヴレターも随
分書いた。あるとき、初めて出す手紙に「アイ・
ラヴ・ユー」と書いて叱られた。その言葉は三回
目ぐらいの手紙に書くもんだ、と十四歳の私は教
えられた。

「物」は部隊にしかなかった。私の勉強机、整
理棚、靴にズボンにシャツ、全て兵隊からのお恵
みだった。そんな難民的な自分たちを、「ギブ・ミ
ー民族」と揶揄した。野嵩高校二年の夏休み中、
徹底的に稼いだ私は、ハウスボーイから足を洗い
勉強に専念することにした。

「春たつ心」進学の道は開けた

当時の沖繩で高校後の進学は、教員養成を目的
にした一年制の文教学校と英語教育、通訳官養成

の元行の責任になっていた。この時期の我が家は、
経済的にも精神的にも戦後最悪の状態だった。テ
ント小屋の生活からも脱出したかった。卒業試験
前の二月中旬に、私は贅沢な香りのする米軍のP
X（売店）で働き始めた。

一方、弟孝行は、沖繩の医者や米陸軍病院の厚
意による薬品や母の必死の看病の甲斐もなく、三
月七日に昇天した。久しぶりに、母が家に帰つて
来た。身心共に疲弊した母だったが、家に温もり
を感じ始めた。

私が高校を卒業した昭和二十五年には、沖繩の
教育に多くの変化があった。まず、首里城の跡地
に琉球大学の開学が予定された。「翻訳のアルバ
イトをしながら大学に行きなさい。謝礼金を出す
というアメリカ人が現れた。謝礼金は高校の父の
給料の二倍以上だった。琉大生には毎月六百円の
生活費が支給されると発表された。入学試験は三
月の予定が四月になり、五月二日まで延期になつ
た。延期になったお陰で、願書も無事提出できる。

私は日本のものでもなく、アメリカのものでもない琉大に行くことにした。入試の結果が発表された日、父の大学への転出も決まった。まもなく教員の待遇も大幅に改善された。

次に、琉大開学の年に、ガリオア資金（占領地域援助資金）による米国留学生の一团がアメリカに出発した。大学に入つてすぐに私はこの試験を受けて合格したが、翌年、奨学金をもらつて日本の大学に留学する機会も得たので、米国留学の資格を放棄した。アメリカにはいつでも行ける、という確信があつた。

大学の敷地には、十軒の瓦葺の大学官舎が建てられた。父もその一軒に入ることにになり、昭和二十六年四月に家族全員が首里に移つてきた。材質や家の大きさは朝鮮の家の比ではないが、二つの畳部屋、台所、風呂場、屋内の便所、大小二つの勉強部屋、床の間、忘れていた障子がついていて、これまでの泊の家や周囲の人々の家に比べれば御殿のようだ。

己紹介すると、彼女の口からいきなり父の名前が出たので驚き興奮した。彼女は父の教え子たちと連絡を取り、夕食会の手はずを整えた。集まつた人の中には、小学生の私に模型飛行機作りに興味をもたせた柳在秀さんや、緑ヶ丘の先輩崔國智さんもいた。夢のような再会に、その夜私たちは興奮状態で話し合った。

ソウル在の父の教え子たちにも、昼食会や夕食会と私は歓待された。父にこんなに豊富なエピソードがあつたのか、と驚くほど彼らは楽しそうに父の話をした。私とスケート場によく通つた全漢炳さんは、朝鮮動乱のとき父から譲り受けた体操の本を、荷袋に入れて戦場を持ち歩いたと話した。十四年前、父を助けた「反日家」には会えなかつたが、春川への旅は、父と春川師範の学生たちの強い絆を知るといふ、絶大な収穫があつた。

旧朝鮮人に関連して私たちが最も感銘を受けたのは、「先生をお招きします」と言つた教科書焼却事件の生徒らと春川師範同窓会が、二十五年前の

それから数日して、私は「琉球列島の居住者である」という米軍政府発行のパスポートを手手に、日本留学生の身分で東京に向かつた。「ときは春、日は朝、…：神、そらに知るしめす。すべて世は事も無し」というロバート・ブラウニングの詩「春の朝」で引揚げの話を開じる。（「春たつ心」は大城立裕先生に課され、私には書けなかつた高校の作文の題である。）

六 それからのこと 国境を超えた師弟愛

母は八十四歳で他界する日まで、心の優しい沖縄の人たちに囲まれて、首里での生活を楽しんだ。次男元行は、琉球大学工学部を出て、工業高校の教師を務めた。三男久光は、東京教育大学でスポーツ心理学を専攻、現在琉球大学教授、この分野に関する論文を書いている。

私は、李承晩時代の昭和三十四年に韓国を訪れた。二週間の滞在中、一日春川に旅した。十四年前の我が家の跡で、三十代の女性に出会つた。自

約束どおり昭和四十五年五月十五日、韓国の「恩師の日」を選んで父を招いたことだった。朝鮮動乱の困難を克服し、教育界や官・財界あるいは独自の分野で活躍しているかつての教え子らに、父は「ありがとう、おめでとう」と言う機会を得たのだ。教師冥利に尽きる体験だつたらう。名越氏の言うように、私たちが韓国から学ぶべきものの一つは、彼らの中に宿る「国境を越えて恩義を感じる心」なのかもしれない。なお、父と春川師範とのつながりは、平成十六年、沖縄タイムスに九回に亘つて連載された。

父は、昭和四十八年五月、日本復帰記念沖縄特別国民体育大会を、沖縄の二十四会場で体育協会会長として開催した。夢の実現を見たのだから、幸せな人だ。琉球大学の教え子から「おやじ」と慕われた父は、九十二歳の天寿を全うした。

研究者としての道

私は大学で仕事をするようになり、北米の研究誌の論文審査委員などを務めた。それは私の能力

や努力だけでなく、その過程でアメリカの大学で学び、研究し、教える機会がタイミング良くあったこと、そしてそのつど、世界的研究者との偶然の出会いがあったことに負うところが多い。私が大学院で心理学を勉強したいと思うようになった昭和二十九年に、ガリオア資金でテネシー州にある教育大学に行く機会を得た。この渡米は、交換学生の身分で何でも見てやろ的なアメリカ生活だった。アメリカは、明るくゆとりがあった。太平洋の孤島から発信する些細な研究上の問いにも、アメリカの研究者は適切な援助を惜しみなく提供した。次は、アイオワ大学の一員として研究をしたいと準備をしていると、大学から助手採用の通知が来て、昭和三十五年、二度目の渡米となる。このときは、ミネソタ大学でも研究員として働いた。

帰沖して、私自身の一連の研究がまとまったので、大学院生相手に講義をしたいと思った。そんな折、ミシガン州立大学に招かれて、昭和四十三

する態度の学習を考慮することも必要だろう。そんな思いでこの物語を綴った。

追記

最後にこの引揚労苦記録の執筆にあたり、引揚者団体事務局との中継ぎの労をとられた千葉県在住の山田敏夫氏からは、数多くの貴重な示唆と、温かい支援をいただいた。山田氏に心から感謝を捧げる。

年、三度目の渡米をすることになった。生涯に一度、初対面の人を相手に自分を売り込んで、自分の望む条件で仕事をするのも面白い。こうした若気の至りでカナダに住む結果になった。ともあれ、米軍支配下の基地の島沖繩には、基本的人権の無視というマイナス面もあったが、偉大な異文化から学ぶプラスもあった。

戦争・暴力行為のないことが平和への必要条件である。しかしそれだけでは不十分だ。異民族グループ、異文化グループの間に、平等でお互いを尊重し認め合う関係がなくてはならない。移民の国カナダは、民族・文化の上で多様性を特徴とする社会だ。私が今住んでいるトロントの人口の半分は、英語・仏語以外の言葉を母国語としている。カナダでは、民族のルーツ、言語、宗教に関係なくすべての人々が協力して参加して、ともに繁栄する平和な社会を造り上げる大実験をしている。平和の礎として、戦争の悲惨を確認することは大切だ。それと同時に、異なった民族を認め、尊重